

このピアニストが協奏曲を演奏するのを聴くのは初めて。ソロが演奏家のオリジナリティを最大限に發揮でき、コンチェルトはその次と聞くが、やはりソリストに選ばれることは晴れがましいコト。それもチャイコフスキー、きっとワクワクドキドキすることに違いないと勝手に決め込んでいたりした。どうオーケストラと共に存して、どの様に個性を發揮するか興味津々だった。富山シティフィル、県内の社会人オーケストラ、10年前交通事故で命を失った若い同事仲間が団員だった、これも初めて聴く機会。

ピアニスト主導の音楽、音楽と共に暮らすキャリアの長じたるゆえ。ピアノの明確な主張にオーケストラが同意し追走する中で、火事場のアンビリーバブルな力を發揮する。ソリスト、優しいキモチ、細やかな気配り、自分が知り得たものを惜しみなく提供とともに、音楽の楽しさを皆と分かち合う。コンサートマスター、指揮者の役割までこなすが、デシャバリ感はなし。慈悲深い人格高潔な女王様のよう、お高くとまる近寄り難さは持ち合わせていない。

練られた音楽、に対するスタンスはいつもの通り誠実、信用して疑いなし。美しさ、きれいさを基調とするノーマルな判断基準、借り物でなく天性のモノ培ったモノ。慌てないで丹念に丁寧に表現、落ち着いて穏やか。伸びやかに朗々と作曲家のロシアン・ロマンチック・ワールドを歌いまくる。情緒に流れぬ知的コントロールの下、オリジナルに感じ得るモノを際立たせることも忘れない。ハッとする瞬間、意外性の不意打ち、特異な輝き、独自な解釈・工夫にみちた表現。聴き手のワクワク感とニヤリ感。説得力ある主張、音楽的信用、それがオーケストラを自分の世界へ巻き込む。嬉しそうで楽しそう、幸せにみちた演奏、ピアニストの新たな面を見せてもらった気がする。期待通りの心地よさに感謝。(2004.7.3)

---

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 1番 変ロ長調 Op.23

(アンコール)

ブラームス：ワルツ Op.39-15

【オーケストラ】富山シティフィルハーモニー管弦楽団

【指揮者】土井 浩

---